

はじめに

東日本大震災津波の発生から13年が経過しましたが、近年の海洋環境の変化による秋サケ、サンマ等主要魚種の不漁、磯焼けによるアワビ資源の減少、貝毒によるホタテガイの出荷減等、岩手県の水産業は厳しい状況が続いています。

特に令和5年度は黒潮続流の北偏が顕著で50年ぶりに6月に本県沖で20℃の海水温が観測され、それ以降も高水温の状態が続いたことから、イサダ漁場の北偏、養殖ホタテガイのへい死、養殖ワカメの芽出しの遅れ、磯焼けの進行等、漁業・養殖業に影響が出ました。

当センターでは漁業指導調査船岩手丸で毎月、海洋観測を行っていますが、昭和48年～令和4年までの50年で海面水温は、距岸10海里内で0.84℃、20～50海里で1.35℃上昇するなど、海面水温は上昇傾向にあります。また、上述したとおり近年は黒潮続流の影響で海面水温が上がっています。

現在、岩手県の漁業・養殖業はかつて経験したことのない環境にさらされていますが、環境を変えることはできないことから、この変化に対応していかなければなりません。

このような中、当センターでは、従来から実施している試験研究に加え、環境変化に対応したサケ稚魚の飼育放流技術の開発、各種藻類の半フリー種苗技術の開発及び養殖試験、アサリ等新たな二枚貝の種苗生産・養殖技術の開発、水揚量が増えているマイワシの原料特性を活かした加工品の開発など海洋環境の変化に対応した研究を行うとともに、得られた成果はその都度現場に普及を図っています。

岩手県の水産業に関わる全ての方が海洋環境の変化と影響に柔軟に対応し、水産業が発展できるよう、当センターは、今後も現場主義を貫き、関係者の御意見・御要望を取り入れながら、これまで以上にスピード感を持って研究に取り組んで参りますので、引き続き御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和6年9月26日

岩手県水産技術センター所長
神 康俊